

鹿児島の火山③ 薩摩富士ともよばれる開聞岳

地質担当 前田 利久

開聞岳は薩摩半島南端に位置する標高924mの成層火山で、均整のとれた美しい山容をしています。山頂部には885年に噴出した溶岩ドームが火口を覆っています。

開聞岳の活動は約4000年前に始まったと考えられています。山体は火山灰やスコリアなどの噴出物と玄武岩質の溶岩の流出を繰り返し、成層火山となりました。開聞岳西側の花瀬海岸で見られる縄状溶岩（県指定天然記念物）は、開聞岳から流出した溶岩流の一部です。また開聞岳東側の川尻海岸では、開聞岳から噴出した火山灰中のカンラン石（olivine；オリビン）が集積したオリビン砂（olivine sand；オリビンサンド）があります。

開聞岳周辺の土壌は「コラ」とよばれており、粘土質で固くしまっているために農業に不向きでした。この「コラ」も開聞岳からの火山灰で、特徴的な色から黄ゴラ、青ゴラ、

紫ゴラなどとよばれています。

歴史時代になって、874年（貞観16年）と885年（仁和元年）の二度の噴火が知られています。874年の噴火では火砕流や溶岩の流出があり、山頂火口が大きく広がりました。この時の噴火で、噴出した火山れきや火山灰によって倒壊・埋没した住居跡が、指宿市橋牟礼川遺跡で見つかっています。また、紫ゴラはこのときの火山灰がたい積したものです。

885年の噴火では、安山岩質の溶岩ドームが火口を覆い、現在の山容が完成しました。山体の八合目付近に成層火山と溶岩ドームの境界があります。



昆虫⑩

プールで冬を越す昆虫たち

昆虫担当 中峯 浩司

冬のプールにはどんな昆虫が見られるのでしょうか。11月1日、学校の先生方を対象とした「フィールドワーカー養成講座」の昆虫班メンバー4人とともに、南さつま市の3つの小学校のプールを調べてみました。

結果は表のとおり。ヤゴの中で最も数が多かったのはウスバキトンボですが、本種は低温に弱く、国内では越冬できません。この後、冬の間に死滅してしまいます。また、近年定着したベニトンボもたくさんいました。

他に、ゲンゴロウのなかまが多く、環境省が絶滅危惧Ⅰ類に指定しているコガタノゲンゴロウも見られました。また、カマキリのような前足で獲物を狙うミズカマキリや水中を背泳ぎで漂うコマツモムシもいました。

プールの底には落ち葉や泥状になった藻が沈んでおり、プランクトンやおびただしい数

の赤虫（ユスリカの幼虫）が育っています。これらのえさに支えられて冬を越す昆虫たちですが、楽園での生活も初夏に行われるプール掃除とともに幕を閉じることになります。

表. プールの昆虫（南さつま市、2007年11月1日調査）

場所	一少ない 十多い 十十大変多い			
	万世小	小湊小	大浦小	
水温	14℃	14℃	14℃	
トンボ目 (ヤゴ)	ギンヤンマ		—	—
	シオカラトンボ		+	
	ウスバキトンボ	—	++	+
	ベニトンボ	—	+	+
	ハネビロトンボ		—	
	ホソミイトトンボ		—	
コウチュウ目	コガタノゲンゴロウ	—	—	
	ヒメゲンゴロウ	+	—	—
	コシマゲンゴロウ	—	—	
	マメゲンゴロウ	—	—	
	ハイイロゲンゴロウ	+	—	—
	ゴマフガムシのなかま	—		—
	ゲンゴロウ類の幼虫	—		
カメムシ目	コマツモムシ	++	++	++
	ミズカマキリ	+		+
	コマヅムシのなかま		—	+
	アメンボ幼虫sp.			—